



- ・現代の『麻雀放浪記』ここに現る
- ・最狂レスラーに痺れる
- ・人類の勝ち筋
- ・がんになる

# 誰もが書きたかったが成し得なかった、

## 現代の『麻雀放浪記』ここに現る

迎賓館は亡き夫から受け継いだ店主敏江が女手ひとつで切り盛りする雀荘。セット卓では大学サークル蔵前倶楽部の結城が怒涛の勝ち星をあげていた。一方フリー卓では長年毎週金曜を常盆とするグループがあった。うち三人は長老風・六〇代・五〇代で、皆が「バクチ焼けた顔」の濃い面々。残り一人はいたって普通の風情だが、なぜか黄緑の学校ジャージを着て打っており、賭け事にそぐわないこと甚だしく思えるが、三人からは敬意を持たれているようだ。他学生を搾取することに飽き足らなくなっていた結城は、この卓では「どんな麻雀が打たれているのだろう。自分たちとは何が違うののだろうか」と興味を持ち始める。

『雀荘迎賓館最後の夜』は麻雀小説である。が、毛色が変わっているのは、打たれる麻雀の内容だけが主なのではなく、雀荘という場を描いていることである。敏江はきれい好きで店内や卓は徹底した清掃が施されている。牌もしかり。ガン牌や材質(象牙と竹の手触りや、『こち亀』では景德鎮の牌なんてものが出てきたなあ)について書かれたものはあっても、牌の洗浄から拭き上げまでを書いたものは絶無と言える。雀荘の収入は基本場所代のみ。固定費は抑えたい。迎賓館では一日当たり八十本のおしぼりを使うが、レンタルすれば月二万。それを敏江は自前で洗濯し、干して、冷・温準備する。業者まかせでは時に臭うものが混ざるため、女主人として自分の店ですんなものは出せない。切り詰める一方で、客が相好を崩すのを見たいがためにちよつとした酒肴を用意する。そんな機微を描いた麻雀小説があったらどうか。

麻雀とは不思議なゲームで、運に左右される要素があまりに多いのに、自分のフォーム(阿佐田哲也)を崩さなければいずれ「流れ」が来ると信ずる者は多い。反対にそんなのはオカルトにすぎず、その時々最善手(これにもいろんな考え方があがる)をとることが和了への近道であり、最終的に勝率を上げるのだ、というデジタル派にも一理ある。この両者のせめぎ合いやブレンド具合が作品を面白くする。本書の場合は生き方が打ち筋に色濃く反映される三人(彼らの背景が描かれるパートはそれぞれに一篇の小説として成り立つほどの読み応えあり)に対し、究極のデジタル打法と呼べそうなジャージ(見たものをカメラで撮るよう次々シャッターを切って記憶する能力を有する。他家の捨て牌が手出しか自摸切りか、選択肢に迷ったか、手牌のどの位置から出たか、ドラ表示牌に目をやったかなどの情報を一打一打三者ごとに分類し蓄積していくらしい)とのコントラストが見事。そこに『麻雀放浪記』の坊や哲を彷彿とさせる結城が挑んでいく展開は期待を裏切らない。



やがて迎賓館は最後の夜を迎える。それぞれの胸に去来するものは、そして勝負の行方は…。

## これもまた、人間の一面

西澤保彦が特殊設定ミステリに帰ってきた。と書くと「特殊設定ミステリ」とは何ぞや?となる人も多いに違いない。『七回死んだ男』では、同じ一日を繰り返す中で殺された祖父の死を防ごうとするタイムリープもの。『人格転移の殺人』は六人の人格が入れ替わる中での殺人事件ものと令和の今ならありそうな設定を三十年近く前に生み出した作者が新たな特殊設定ミステリに挑むと聞いては読まずにいられない。

今回の新作『ファイナル・ウィッシュ ミューステリオン館』では生と死の狭間の異次元に存在する館に今までの願ひ「ファイナル・ウィッシュ」を使って十人の老若男女が集められるところから始まる。誰がどんな理由で集めたのか謎を解いていく話だ。

過去の出来事と現在を行き来しながら謎は少しずつ解けていく。心理戦を予想していたところに始まる急なバトルロワイヤルに登場人物だけでなく読み手の気持ちも慌てる。異次元という設定をうまく利用しながら、徐々に謎のピースを合わせていくところはさすが生みの親だと感心するところもあった。

全てが終わった後の独白は、ある程度想像していた上をいき驚愕と共に人間心理ならあり得ると納得もしてしまう。著者らしさを感じて西澤保彦は健在だったと改めて実感した。



## 風を読み、風を創る

本屋で働いている以上、気になるのは本屋に関する本である。最近、本を整理する機会があり、二千冊ほど処分したのだが、未だに本屋の本は我が家の本棚の一角を占めている。棚にあるのは現代の本屋についての本。古いものでも昭和の本屋だ。それより昔の本屋についての本は見かけない。

『蔦屋重三郎』は近世の本屋である。蔦重の名前が世に出る頃は、老中・田沼意次の時代であった。初期の施策は世間に高揚感を与えるものであり、そんななか生まれたのが「通(つう)」という美意識。江戸におけるおしゃれでかつこよさを表す言葉である。「通」を問われる場合は

遊び場であり、それが吉原という場所だった。その時流を読んでいたのが萬重である。萬重の生まれ育ちは吉原、萬重店も吉原に構えた。吉原にくる「通人」に向けた商品を刻する・販売することで、吉原界隈での信頼を勝ち取っていく。ここから江戸に名を広める始まりとなる。

江戸時代に上木を行うのは本屋であった。上梓は本屋の営業の一部。出版物に出版社の広告を掲載したのは近世において萬重が初。自社の出版物で商品の宣伝を行うのは、現代では当たり前だが、すでに江戸時代には行われていたのだった。

喜多川歌麿・東洲斎写楽といえど萬重に見いだされたことは論を俟たない。萬重がいなければ彼らの描いた作品を現代で目にする事はなかったかもしれないが、それだけが萬重の魅力ではない。近世において所謂コンテンツビジネスを革新し続けたということが萬屋重三郎の真価である。

「べらぼう」とは程度が甚だしいことを指す。二〇二五年大河ドラマのタイトルがこうなった理由もうべなるかな。萬重の四十八年という須臾な生涯の中で、時代と勝負し続けた一代記は箆棒におもしろそうだ。



萬屋重三郎役 横濱流星

## 最狂レスラーに

### 痺れる



子どもの頃、テレビを点けるとよくダンブ松本が出ていた。収録中のスタジオに突如乱入して暴れまわる怖い人、というイメージしか無かった私は、Netflixの『極悪女王』を観て、脳天を直撃されたような激しいショックを受けた。もともと全女(全日本女子プロレス)を知りたい!という衝動から読んだ今、関連書籍を読んでいる。

『玉袋筋太郎の全女極悪列伝』は、八〇年代にカリスマ的人気を誇ったクラッシュ・ギャルズの二人をはじめとするレスラー、関係者との直接対談が収録されている。知れば知るほど特殊で異常な全女という団体で、命がけの青春時代を過ごし、真剣勝負を生き抜いたトップレスラー達の言葉は真つすぐで熱く、胸を打つ。

白眉は、極悪レフェリーとして名をはせた阿部四郎の生前のインタビュー。高速カウント、反則黙認、凶器の提供など、極悪同盟に肩入れたレフェリングを繰り返した、テレビの前の視聴者を煽り続けた。どこか憎めない、不思議な魅力がある人物である。

心の優しい松本香がいかにして極悪女王に変貌したのかを知りたいため、ダンブ松本自伝『ザ・ヒール』極悪と呼ばれても必読。ろくでなしの父親に苦しめられた母親の日記が壮絶だ。

なぜ人々は痛めつけられる長与千種に熱狂したのか、八〇年代カルチャーや群衆の心理を学ぶ上でも大変興味深い、貴重な記録となる一冊である。



ダンブ松本

## いざ、大連へ!

西暦二〇一〇年に幼い息子を連れて中国にガチ留学した女性の体験記。それが、『崖っぷち母子、仕事

と子育てに詰んで中国へ飛ぶ』です。わずか十数年前とは言え、スマホが普及していない時代。中国語も話せない日本人がいきなり中国に飛び込むなんて無謀では?しかし、意外や意外。母子が助けられた中国社会の面倒見の良さに感銘を受けます。中国社会の方が、人付き合いが濃い分、育児の時は助かるということらしく、古き良き日本もそうだったのでしょうか?

一方、日本とは真逆の、中国社会の適当さに驚かされます。卒業式などの重要イベントが前日にキャンセルになったり、チェーン店の味がその日の料理人の気分によって違ったり、遊園地やバスの「子供料金」が年齢でなく身長で決まったり・・・異文化体験とはそういうものなのでしょうが、遅く生きていく力が求められるようです。

留学先が中国の大連ということ、アフリカ人の他、ロシア人、韓国人の留学生が多く、彼らとの交流の様子が大変面白いです。「一、二、三、」の次がなんで四なんだ?という非漢字圏の人々の疑問には苦笑してしまいますが、

トラブル続きの衝撃の日々の中、母親が子供を見守って観察しながら、子供の目線で紹介される中国社会が面白く、癒されるエピソードがたくさんあります。

結局、皆それぞれの人生で勝負しているわけです。三十代後半で海外

脱出とは、その思い切りに羨ましくもなります。きっと子供と一緒にだから乗り越えられたのでしょうか。また、大人になってからの中国留学というレアな経験後のキャリアアップ、留学前と同じ仕事のステップアップしたものになった(全然違う仕事に就いたわけではない)ということもどこか安心し、参考になりました。



## 異文化と闘えますか?

近年、日本で働く外国人が増え、職場の多様性が大きく広がりました。私もそうですが、四〇代以上の世代はこれまで異文化と関わったことが非常に少ないです。そのため、日本人特有の「行間を読ませる」「あいまいな表現」、そしてそれらを、相手もきつと同じように考えてくれるはず、という思い込みが、異文化の相手とのコミュニケーションをさらに難しくしている。自己主張のはっきりしている欧

米文化や、メンツを非常に大切に  
する中国などは異文化の例として  
よくみかけますが、この著書では  
インドネシアやミャンマー、日系  
ブラジル人などいろいろな国の考  
え方の特徴などが説明されていま  
す。タイトルに「闘ってます」と  
はありますが、もちろん勝ち負け  
がある問題ではありません。自分  
の常識を押し付けることなく、相  
手を理解しつつ正しくコミュニケ  
ーションできる知識と対応力が必  
要なのでしょう。私もついついま  
わりくどい言い回しをしてしま  
うため、シンプルな話し方を心掛  
けたいと思います。ただ、外国人ど  
ころか、世代の違う若い日本人相  
手でも異文化の壁を感じてしま  
うのはどうすればよいのでしょうか。



### それが人類の勝ち筋なの かもしれない

古くから生物界は弱肉強食と  
され、あらゆる生物は生き残りを  
懸けた競争を繰り返している

されてきた。現代に生きる生物は  
その競争の勝者というわけだ。し  
かしながら、最近ではその考えに  
も疑問符がついている。生物同士  
の関係は競争だけでなく、時に協  
力し、共生していくことで発展、  
調和しているというのだ。

『互恵で栄える生物界』では、  
植物と土壌微生物との綿密な共  
生関係から、それを活用した新た  
な農業方法に触れる。微生物のミ  
クロな世界を、農場というマクロ  
な視点で観察することで、現代主  
流な農業とは一線を画している。  
そして放牧が行われているネバ  
ダ州では、なんと砂漠がかつての  
湿地に戻り、環境が再生したとい  
う。現状の放牧方法をただ制限す  
るといっわけではなく、放牧の良  
い側面も活用しているのが素晴  
らしい。そのあまりに鮮やかで劇  
的な変化は、ぜひとも本書で確認  
していただきたい。

河川環境の面では、いささか納  
得しがたい面もある。なにせ我々  
は、「崩れる大地」のひざ元、七  
つの暴れ川の脇で、水はけのいい  
扇状地に大量の湿地を作ってきた  
民族である。水との付き合い方  
は独特だ。ただ本書を読んでいる  
と、現状の方法とは別の付き合い  
方があるのではないかと考えて  
しまう。人類は「自然に打ち勝つ」  
といった表現を使いがちだが、人  
類が真の勝者になるためには、他

種、環境と協力関係を気づくこと  
が必要なのかもしれない。



### 六十年前のドラマが

#### 問いかける

一九六四年東京オリンピック・  
パラリンピック。日本の障害者ス  
ポーツはここから始まりました。

社会が障害者を「隔離」してい  
た時代。突如「選手」として集め  
られたアスリート候補者たち。不  
慮の事故で一瞬にして障害者とな  
り、生きる希望を見失っていた彼  
らは、車椅子バスケットボールを  
はじめ、様々な競技に取り組むこ  
とで体力とともに自信を取り戻  
し、やがてそれは生きる希望とな  
り、社会復帰の原動力となってい  
きます。そして、その選手たちを  
支え、導き、今日までの土台を築  
いた人々。見たこともないことを  
行う困難さは想像に容易くありま  
せん。

「パラリンピックがなかったら、  
日本のバリアフリーはなかった」  
「でも本当が変わって欲しいのは  
心なんです」これはこの大会に出  
場したある選手の言葉です。

六十年の時を経て、社会は何が  
変わり、何が変わっていないのか。  
六十年前のドラマが問いかけるこ  
とは。今を生きる私たちは何が  
出来、何を成すべきなのか。考え  
させられる一冊です。



### データ活用が 勝利への近道

WBCの侍ジャパンや大谷選手の活  
躍で選手の練習風景映像や実際の  
打球・打球の分析情報を目にするこ  
とが増えてきています。

『データ・ボール』では、分析に  
使用されているトラックマンやホ  
ークアイ、ラプソード、ブラストな  
どの測定機器の成り立ちをはじめ、  
プロ、アマでの機器の活用の現状、  
日米でのビジネスとしての流れが  
分かりやすく紹介されています。

また、前年まで育成選手だった宇田  
川投手がスター選手たちのなかに  
溶け込めた一因など選手の秘話も  
あり、普段見えていた試合の答え合  
せのように楽しめました。

MLBでは全球場のホークアイで全  
試合の選手情報が全球団で共有さ  
れています。そんな中でもMLBを連  
続受賞している大谷選手が恐ろし  
く感じます。

データにより裏付けされた選手  
起用が効果的に実行される反面、速  
球投手が数年後にトミージョン手  
術（靭帯再建手術）を受けたり、強  
打者が斜腹筋肉離れを頻発してい  
る現状もあります。データ任せに選  
手を酷使すれば、人間の靭帯や筋肉  
は耐えられないこともあるでしょ  
う。MLBで活躍している日本人選手  
たちがこれから先十年くらいなん  
とか選手生活を全うできたらな、と  
願うばかりです。



### 2m主人公の新世代 バスケット漫画!

何かしらスポーツ漫画にハマる  
ことが多いのですが、今一番続きが  
気になっているのがバスケット漫画の  
『アオバノバスケット』です。

身長約二メートルの主人公青葉太樹は目標もなく無気力な日々を過ごしていましたが、中学一年の頃にバスケットU16日本代表・明星レオと出会いバスケットに真剣に向き合うことを決めます。全国優勝校の主将になった高校三年のレオと戦うことを目標に、新鋭の強豪高校に入学した青葉の成長が描かれていきます。

入学早々に勝てるのは身長だけという現実にはぶつかり、基本的な部分を磨いていく序盤も面白いですが、五巻から始まる東京王者との試合でこのシリーズの面白さが爆発していました。全国クラスの留学生選手に対抗するために、試合経験が少ない青葉が途中出場。実力の違いすぎる相手に対する主人公の無力感、考え続けた青葉の気づきから始まる味方チームの躍動と目まぐるしい展開に目が離せませんでした。

# カケオくん

40 『麻雀漫画50年史』  
 どう冗談のようだが立派な研究本が出た。国会図書館にある麻雀漫画誌を全部チェックされたようだ。

『バカの壁』を代表に多くは解剖学者、あり、猫好きからは飼ひ猫まるが思い浮かぶ。四年前に大病されたもの

『バカの壁』を代表に多くは解剖学者、あり、猫好きからは飼ひ猫まるが思い浮かぶ。四年前に大病されたもの

『バカの壁』を代表に多くは解剖学者、あり、猫好きからは飼ひ猫まるが思い浮かぶ。四年前に大病されたもの



バスケット漫画と言ったら有名作品の名が浮かびますが、現代バスケットの戦術など今の時代だからこそを追求しているところがこのシリーズの魅力です。七巻まで発売された今も主人公は伸びしろだらけでその成長が楽しく、今一番おすすめたイスポーツ漫画です。

## がんになる！

『バカの壁』を代表に多くは解剖学者、あり、猫好きからは飼ひ猫まるが思い浮かぶ。四年前に大病されたもの

の八十歳半ばでお元気そうという印象だった。だからまたまた見た「明るく楽しい闘病記」という広告の一文と『養老先生、がんになる』という書名に驚く。生涯二人に一人はがんになるという話から誰でもなる病気が、進行具合、治療方針また治療後の状態によつて生き方が変わる。生死が分かれる時もある。そこに不安を感じる。



のも大きかったようだ。養老先生の闘病が、本人、旧知の中川先生、担当医、娘さんの目線で描かれる。健診の話や治療の話、医師目線の考え方がわかるとともに父に元気でいてほしいと思う娘さんの気持ちがとてもよくわかるページもある。

## 片付けの敗因とは

毎年、年末が近づくと「新年は気持ち新たに！」と家の中を片付け始めます。窓やキッチンをピカピカに掃除することはできるので、使っていないものを捨てるというのをやり切った年は残念ながらありません。何かしら捨ててはいるのですが、迷って残した頂

き物のグラスのセットやカトラリーセットなどいくつかの物が年を越し、「お久しぶりです、今年は何を捨てます？どうされますか？」と、また一年ぶりの再会を果たしてしまいます。

今回私の背中をグツと押した一冊が、やましたひでこさんの『暮らしも心も調う大人の断捨離手帖』です。とても重要だったのが、捨てられないことには三つの心理タイプがあるということ。まずは、家族全員がどのタイプであるかを調べました。片付け中に家族の意見が邪魔をするということも思い出したからです。タイプ別にどう受け答えをし、納得して手放してもらおうか。これが大きなカギとなると思ったからです。結果、作戦は成功しました。

実家の片づけを検討されている方にはおススメですが、読むタイミングを間違えると家が修羅場となりますのでご注意ください。「実家、かたづけようか。」と家族に宣言する前に、じっくり読んで対策することをお勧めします。

暮らしも心も調う  
**大人の断捨離手帖**  
 「捨てられないモノ」が男女で違うのはなぜ？  
 著：やましたひでこ  
 出版社：Gakken